

ドイツの友人、イネスさんが10月11日に来日された。スタディ・ツアーで、京都、奈良を手始めに2週間観光された後、帰国便を遅らせて、エルミタージュの客人となり、7年ぶりの再会を楽しんだ。

彼女は福音ルーテル教会の熱心な信徒であると同時に説教者としての資格も持っておられる方なので、今回はまず、ルーテル学院大学にご案内。三鷹市郊外の閑静な所にある小さい大学である。けれどもルーテル神学校としての歴史は長く、1909年(明治42)熊本に始まり、三鷹に移って45年になる。全国のルーテル教会へ伝道者を送り出し、また、世界のルーテル教会と密接に関係している。



職員の方が礼拝堂を案内。その後、日本ルーテル神学校々長・教授の石居先生が時間を取って下さって、日本におけるルーテル教会の現状をお話し下さり、彼女の質問に丁寧に答えてくださった。現在神学生は11名なので献身者が求められているところであろう。



礼拝堂に洗礼盤がないのが彼女には不思議に思えたようである。ドイツの教会には必ず備えてあるとのこと。ここは大学のチャペルなので、教会ではないということでも了解。木彫の、迫力のある聖壇の十字架、壁面の使徒を派遣するイエス像が個性的だった。また、告解室のような小さな祈祷室の茨の冠の Kristus 像に胸を突かれた。また、日曜日には三鷹ルーテル教会に礼拝堂として開放しておられるとのことだった。



地続きで隣が東京神学大学だったので、礼拝堂を拝見させていただいた。こちらはアポイントを取っていなかったが、喜んで礼拝堂に案内して下さいました。正面の十字架はラテン十字架だが、縦の方が長い。改革派の教会堂の感じがする簡素な礼拝堂であった。彼女がドイツの福音ルーテル教会と知ると、神学専門の蔵書が11万冊という自慢の閉架式の図書館内も特



カルヴァン「キリスト教概要」

別に案内して下さいました。彼女は古い、ドイツ語や、ラテン語の原書を見つけ、ルター、メランヒトン、アウグスチヌスだと、指さしながら、非常に喜んで、熱心に見入っていた。膨大な蔵書に、独自の分類法を採用しているとのことだった。修士論文も保管してあるから見なさいと言われた。夫の論文は借り出されてなかったが、夫の同級生たちの名前が並んでいる論文の棚を見て、感無量だった。



その後、浅草に向かった。そこに津軽三味線を聞かせる民謡の店がある。夫の友人の、ハイデルベルグ大学で神学博士号を取った鈴木牧師と合流し、ドイツ語で会話を楽しんでもらいながら、楽しく食事をした。津軽三味線のライブが始まると、全員食べるのも忘れて聞き入った。高橋竹山が、土俗の民謡である津軽三味線の芸術的価値を高め、心に響く、深い情念を表現する音楽に高めてくれたと感じる。若い人達がこの音楽に魅せられ、熱気溢れる演奏をしている。海外のお客様が何組か来ていた。イネスさんも、始めて聞く音楽を興奮しながら喜び、楽しんだ。